

認知科学と循環論法

脇坂崇平

理化学研究所脳科学総合研究センター

ソーシャル・ニューロサイエンスにおいては、そのパラダイム上「循環論法」が侵入する可能性が非常に高いということが近頃再認識されつつある。ここでいう「循環論法」とは、一言でいえば「ある結果から原因（仮説）を遡及的に作り上げておいて、結果をえる前にあらかじめ仮説を有していたということにし、原因の妥当性の検証にその結果を用いる」ということを意味する。つまりは、アブダクションを行っておきながら、それを隠して演繹的プロセスの体裁をとる、ということである。このような循環論法が、意図の有無にかかわらず分析過程に忍び込みやすいことがちょうど一年前ほどに指摘され、注目を集めている。

だが、他の経験科学が循環論法と無縁であるということでは決してない。科学的営為というものは、周知の通りアブダクティブな推論プロセスに溢れているのである。一方で論文等の形でまとめ上げられる科学的主張は、見かけ上であっても演繹的、無時間的な論理展開が要求される。このギャップを埋める必要がある以上、循環論法的展開は程度の差こそあれ不可避であるし、それは科学的主張の本質であると捉えるべきだろう。まずは、この点についての議論を春の年会から継続して進めたい。

もう一点。日常における我々の推論は多々アブダクティブであるということについて異論はないだろう。あたらしいことを<発見>するとは、パースに遡らずともアブダクティブなプロセスであることは明らかである。そしてそのようなプロセスは、社会神経科学で指摘されたものとアナログ的な循環論法的展開の体をわかりやすくとするケースがある。今春の年会ではそういった例について述べた。だが、そもそも自らがどのような論理に基づいて意思決定・判断を行っているかを内観するという行為自体がアブダクティブであり循環論法的なのかもしれない。これを示唆する認知科学上のある研究について今回は触れたい。

Choice Blindness という現象が、ピーター・ヨハンソンらによって発見された。それは以下のようなものである。選択肢が複数ある内（A、B）、被験者にひとつを選択させる（A とする）。その後、被験者に気づかれないよう選択結果を B にすり替える。時をおかず「なぜ B を選んだのか？」と質問すると、被験者はとまどいを示しつつも、B を選んだ理由を<作り上げて>述べるケースが多くみられるのである。意思決定の（偽の）結果から、決定の内容を後付で作話するという循環論法構造をここに認めることができる。

同様の作り話は、選択結果が入れ替えられず、“正しく”原因の想起がなされるときにさえ行われているのではないか。ヨハンソンらは後続研究にてそのような主張を展開しているが、筆者もそのように考えている。原因・結果の展開が演繹的なものであろうとなかろうと、それは想起されるとともにダイナミックに再構成される。内観とは、作話行為であ

る。—このようなイメージである。また、この再構成が長期記憶のタイムスケールで生じるならば、ただ<記憶間違い>として扱うこともできるかもしれないが、**Choice Blindness** 関連の研究では、進行形ともいうべき、ごく短いタイムスケールで間断なくなされる可能性を示されている。であるならば、そのような再構成に対応する、より直接的な神経基盤が存在するかもしれない。この点については、特に他の参加者とともに、議論を深めたい。